

日本記者クラブ会報

第157号
1983年
3月10日発行
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
◎ 社団法人 日本記者クラブ
電話五〇三一二七二(代)

予算編成方針を決定

総額二億三千万円の見込み

昭和五十八年度の当クラブ事業計画作定方針ならびに予算編成方針を決定する総務委員会が、二月二十三日に開かれた。事業計画については来日する国賓・公賓など外国の要人は当クラブの昼食会または記者会見に臨むことが恒例化しており、また中曽根内閣の閣僚との会見も国会審議の關係で四月以降になる見込みなので、五十八年度中には随時このような会合を開く。また毎月十日に発行する日本記者クラブ会報の紙面では、たびかきなる講演記録など収録しきれなくなってきたので、必要に応じて特集号を増刊するなど、事業の拡大をはかる方針をたてた。予算の収入の部では、毎年二月一

日現在の会員数に基づいて次年度の会費収入見込みをたてることとなっているが、本年二月一日の会員数は二百社一、九二六名で、昨年比し二社一〇七名ふえており、五十八年度には六百万円以上の増収が見込まれている。その他の収入を加えて五十八年度には九百万円近くの増収が

クラブ賞推薦委開く

昭和五十八年度の日本記者クラブ賞推薦委員会(委員長・殿木圭一会員)が二月二十二日に開かれ、十名の候補者について意見を添えて選考委員会に具申することとなった。選考委員会は三月十日に開かれる

見込まれるので、今年度比三・九一パーセント増の総額二億三、〇〇〇万円ほどの予算案を作成して、三月十日に開かれる理事会に提出することとなった。この予算案は理事会で検討したのち、三月二十九日に開催される第二十回総会(五十七年度臨時総会)に上程されることとなる。なお総務委員会では、当初から据え置きとなっている会議室、宴会場などの貸室料も、改定してよい時機にきているのではないかという意見が出され、事務局で検討することとなった。

理事会の承認を得て、理事長が理事のなかから任命する委員によって構成されることとなっているが、二月二十三日に開かれた総務委員会で、総務委員のなかの候補者を出していない社の委員に理事若干名を加えて、選考委員会を構成する方針を理事会に答申することとなった。

防災演習を実施

東海大地震を予知して午前十時半に判定会が開かれ、同十一時に警戒宣言発令、そして十一時半に東京地方は震度五の強震に見まわれたという想定で、二月二十五日に日本プレスセンタービルで防災演習が行われた。ビルには外資系の会社も入居しており、演習実施中の英語の掲示や日英両国語の放送もなされた。

当クラブの自衛消防隊もこれに協力して事務局職員は警戒宣言発令時にはヘルメットをかぶり、火元の点検、落下物、転倒物、非常装備品の点検などを行ったが、午前中のことで会員のクラブ施設利用者も少なく、一般にはほとんど目立たなかった。

三月一日現在の会員状況

法人会	員	一四三社
基本会	員	六二四人
個人会	員	一、〇四九人
法人・個人賛助会員		五八社 一七五人
特別賛助会員		七三人
名誉会員		一人
計		二〇二社 一、九三三人

とっておきの話

南極とシュバイツァー

—アフリカ取材ずっこけの記—

山 崎 英 祐



に「お元気で」と握手してから、思わずニヤリと笑ってしまっただ。

それから二週間後、私は南ア連邦のビザを取るためローマへ向かったが、すわり続けて

三十二時間という長い空の旅、ローマでは南ア大使館に日参するという気苦労のすえ、やっとOKとなったのは十二月下旬だった。

南アは人種差別の国だけにマスクミへの警戒心が強く、観測船の入港を見届けてから入国を許可した次第だった。

ビザは手に入れたが、こんどは濃霧のためロンドン発のBOAC機が二日も遅れ、ナイロビで乗り継ぎのサウス・アフリカン機も奥地のローデシアに立ち寄ったり、海岸のダーバンに降りたり、ヨハネスブルグで休憩したりで、ケープタウン入りしたのは真上に南十字星が輝くXマスの前々夜だった。

予約していたホテルに飛びこむ

と、本社からの電報が先回りして私を待っていた。

「キョウテイサイカクニンシタ、シュザイトリヤメヨ」

私はフロントに突っ立ったまま、全身の力が抜けてゆくのを覚えた。なんのことはない、江戸のカタキを追っかけてきて、返り討ちにあったようなものである。

Xマス・イブの夕方、ホテルで観測隊の田さんらと食事のあと、私はふたたび旅装をととのえてガボンの奥地まで行かねばならなかった。本社からの指令第二報には「シュバイツァーラシュゼイセヨ」とあったからである。

こんどは田さんがニヤニヤ笑いながら「お元気で」と言った。

「密林の聖者」に会う

ノーベル賞で世界的に知られるシュバイツァー博士は、一九一三年いらいガボンのランバレーネで風土病レプラの治療を続けている。「密林の聖者」である。哲学者としても、またパッサハの研究演奏家としても有名だ。博士はまれにみ

「いかなれば、江戸のカタキを長崎で討つ、ということだ。がんばれよ」。

同僚たちの、奇妙な励ましのことばに送られて、私は羽田からアフリカの南端ケープタウンへと旅立った。

「宗谷」を追って

昭和三十一年十一月、第一次南極観測隊をのせた「宗谷」を追って、その最後の寄港地ケープタウンに先回りして取材しようというわけである。

いまでこそ南極も珍しくないが、当時としては初の国家的大事業で、日本が国際協調への第一歩をふみ出した歴史的壮挙であっ

た。

観測隊員五十三名中には、報道担当として企画に協力した朝日と、各社代表としての共同通信の両記者が加えられていた。

だが各社からは、途中まででよいから乗船させろという要求が出され、もめにもめぬいたあげく「乗らず、書かず、扱わず」の三原則みたいな協定が出来上がってしまった。

そこで協定のワケ外で報道する方法はないかと考えたのが読売取材陣で、なにはともあれ「宗谷」を追っかける、ということになり、私が盗塁ランナーの役を仰せつかった。

十一月八日、晴海で観測船を見送るとき私は、代表の共同通信・田英夫さん(現参議院議員、社民連代表)



治療ぶりをみるシュバイツァー博士（山崎会員撮影）

るマスコミざらいで、ヨーロッパの記者たちは病院まで出かけていって、は支那払いを食っている。私は博士との会見の約束をとりつけるため、まずコンゴ河をへだてたベルギー領のレオポルドビル（現キンシャサ）に入り、手紙で訪問したい旨を伝え「お返事を当地でお待ちします」と結んだ。

博士は近くの都市まできてスタ

ンバイしている日本人記者に同情されたのか、年を越えた正月八日になってOKの返事が届いた。

博士の誕生日は一月十四日である。私はその日にタイミンダを合わして記事を書こうと心に決めた。

海のように広いコンゴ河を連絡船で渡り、手続きもそこそこに飛行場へ駆けつけ、双発プロペラの貨客機に乗りこむ。ランバレーネには道路

がないので、オゴウエ河を船で廻江するか、密林を飛びこえて飛行機で行くしか方法はない。

機内は梱包された荷物や、束ねられた青果物で一杯、その一隅に木製のベンチがあるだけだ。乗客の黒人女性が赤ん坊に乳をふくませようと簡単な胸をはだけた。たん、巨大な乳房いっばいにイレズミがあるのを見てギョツとしたり、スリルとサスペンスの離着陸を数度重ねたすえにランバレーネに着。ここからジープでオゴウエ河に向かい、シュバイツァー病院行き丸木舟に乗る。

足指のないレプラ患者の黒人六人が懸命に漕いでくれる。頭上

を、大きな鳥がカン高い鳴き声をあげてかすめ飛ぶ。アフリカにきた実感がはじめて全身を包んだ。

シュバイツァー博士との会見は大成功だった。質問にも答えてくれ、オルガンも弾いてくれた。病院の敷地内も、くまなく案内してくれた。私が、社会面全面を埋めるほどの大原稿を書き上げたことは言うまでもない。

「きょう八十二歳の誕生日を迎えるシュバイツァー博士は：」の書き出しではじまる記事は、十四日付のトップを意識したからである。

「ひばり」に差し換え

だが、実際には翌日まわしとなった。なぜだ、である。あとでわかったことだが、十四日付早版の輪転機が回ろうとする寸前の十二日夕方、東京・浅草の国際劇場の舞台で美空ひばりがファンの一少女から塩酸をかけられ火傷するという突発事件が発生した。紙面の半分を埋めていたシュバイツァー会見記は差し換えられ、ひばり事件がより以上のスペースで全面にひろがったのである。

る。

かくて誕生日というタイミンダを狙った記事はウラ目に出て「六日のアヤメ、十日の菊」と成り果てた。ケープタウンに続いてシュバイツァーもずっこけたのである。

それにしてもニュースバリユールって何だろう。その後の取材を終えて四か月後に帰社したとき、当時の上司、原四郎さん（現読売新聞監査役、日本記者クラブ初代理事長）の言葉を、私はいまでも思い出す。

「うん、シュバイツァーより、ひばりが強かったんだ」。

やまざきえいすけ氏略歴 大正六年東京都生まれ。上智大学新聞学科卒。昭和十五年読売新聞社会部入社、戦時中は報道班員としてマレー、ジャワ、ラバウル従軍、戦後は政治部員、社会部次長、アフリカ特派員、週刊読売編集部長、図書編集部長、編集局次長、編集委員会幹事、北海道交社長を歴任、五十年退職。現在、同社社友、評論家。

プロ野球担当

ワーキングプレス

スポーツ記者はまず想像性が豊かであることが絶対条件である。12球団の支配下選手が七百二十人。管理する球団事務所、統括するコミッション・ナード事務局、セ・パ両リーグ連盟を含めてもせいぜい千五百人足らずの人間で運営している世界だ。その中でも常に紙面の対象となる人はほんのひと握りである。だからこそ、書く側の難しさがあるのだ。

ONが全盛時の四十年半ばは一週間、十日間ぶつ続けで王・長島を書いたものである。打ったホームラン、相手投手、球場こそ違え連日、同一人物を書かなければならぬ。苦しきは、当時の担当記者しかわからない苦悶であったろう。日常生活で、毎日それほど変わったことをやっているわけではない。それほど関係ないと思われる試合前の行動や言動に、記者がおかしいほど神経をとがらせるのは何としても与えられたスペース

を埋めなければならないという責任からで、王や長島、いまで言えば江川や田淵、掛布の一言一句を細大もらさず聞きとろうと人混みの中でもがくのはそうした理由からである。おもしろく読ませるためには表現力も大きい。身近な比喻を駆使すればもつと楽しい。しかし、それは読者に感銘を与えるための30%くらいにしか当てはまらないだろう。やはり重要なのは一つの言葉の中からの

想像力と表現力みがく

森本 勇

(スポーツニッポン新聞社運動部長)

洞察である。「外角に落ちる難しいフォークだったな」の言葉からいろいろなことが連想される。いつもだつたらどんな打球に終わっていたのか。過去に同じようなホームランがあったのか。その時の投げる側と打つ側の心理状態は……。ここに蓄積されたエピソードがふんだんに入れば、もう完べきである。

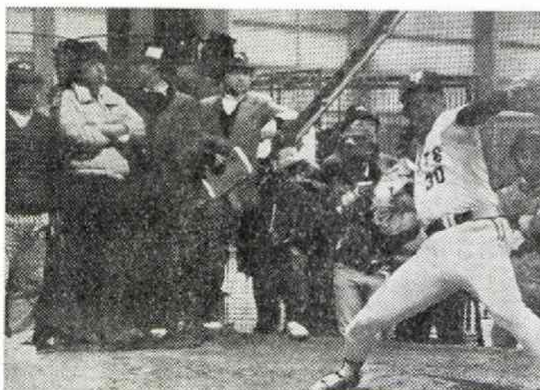
政治部や社会部のように善悪がは

つきり色分けされているわけではない。また一回きりの取材で縁が切れるという社会でないだけに、野球記者の置かれた環境は厳しい。ある著名な作家を日本シリーズのゲストとして迎えたことがある。試合終了から一時余りの限られた時間内で、そして騒々しい記者席で書かなければならない原稿に、その作家はとうとう静かなホテルの一室に逃げ出してしまった。この時ほどスポーツ記者の優越感

にひたつたことはなかった。出てきた記事のインパクトの強さも、担当記者にははるかに及ばないものであっただけに、よけいにうれしくなったものだ。

と言つてもしよせんは人間と人間のつながりが全て。これだけではこの社会でも同じだが、出来ごとをことさらオーバーに表現しても、ニタリと笑つてうなずいてくれる人もいれば、目くじらをたてて怒る選手もいる。だから書く側の人間を見る目も必要で、そうした積み重ねが選手と記者の人間関係を確固たるものに

作り上げていくのだ。中にはカバン持ちのように家庭にまで入りこんでドブプリ浸りきる人間もいるが、こうした人に限って記者としての能力は不足している。ある線を越えて接近しすぎると、その選手に何か大きな問題が発生した時、書くに書けないような同情心が働くからで、これだけは仕事柄慎まなければならない。密着はいいが決して癒着であつてはならない。さて、二月一日に解禁されたキャンプも打ち上げ、いよいよオープン戦に、スポーツ記者の想像力がうずきだす。



マイペース調整の江川の一挙手一投足に心理を読もうとする取材記者(巨人軍・宮崎キャンプ)

千葉大女医殺し

ワーキングプレス

「一件落着」というには、何ともふっきれない、あと味の悪い結末で、三十七日間、正月返上で追いまくられて来た記者たちには重い疲労感だけが残った。

千葉大医学部研究生、椎名敦子さん(二五)殺しで、被疑者として逮捕された同じ研修医の夫、正(三三)が殺人罪で起訴された日、記者会見した地検検事正は、コトもなげに言った。

「(今回の事件は)さほど難しい事件とは思わなかった」。続けて「(夫は)公訴事実の通り自供している」「凶器と認められる電気コードはすでに押収した証拠物の中にある」とも話した。ところが、肝心な点については、質問をはぐらかし、口をつぐんだ。夫が殺意を抱いた理由、絞殺に至るまでの経緯、凶器の裏付け、そして完全自供したとされる夫の供述内容——など、多くの点が依然、不明のままなのだ。検事正は、こ

な答え方に終始した。

——殺害の動機は何か。

「詳しい内容は、法廷で明らかにする」。

——夫の性格をどう見ているか。

「被疑者のプライバシー、人権を配慮すると、そこまで申しあげる勇気はない」。

——夫の自殺未遂の動機は。

「それは、ちょっと申しあげかね

「言えないづくし」の会見

杉田 幸雄

(読売新聞社千葉支局長)

る」。

確かに、捜査に秘密は付きものだし、事件の真相は「公判で明らかにされるべきもの」だろう。が、これほどまでに「言えないづくし」の会見も、まためずらしい。記者たちは「公権力の情報のカベ」に、歯がみさせられたのであった。

とくに、質疑の中で、検事正の口から「プライバシー、人権への配慮」が明示されたのは注目に値す

る。地検、県警ともに「夫が妻を殺

した(だけの)よくある事件。たま

たま二人が若い医師だったに過ぎない」と、冷静さを装い、ノーコメントで押し通した。そのウラには、世

間の関心の高まり、週刊誌や、テレビのニュースショー番組の独走に對

する、けん制の気持ちがあったのではないか。

当局は「ありふれた事件」でかた

付けても、世間には、

環境に恵まれた若い

エリート夫妻の間の

殺害事件となれば、

第一報段階から「一

億総探偵」に、かり

立てる要素は十分だ

ったろう。夫妻の間柄の真相、現場

の状況、夫の不可

解な供述——と、

その不自然さに捜

査の目が向いたの

と同様に、報道の

目が、読者の目が

注がれた。

そうした中で、

夫の自殺未遂、「私

が第一発見者」と

いう夫の供述が出て来て、一億総

推理に拍車がかかる。

加えて、女友達のフィリピン娘が登場するに及んで、「突撃式レポーター」の格好の材料になって

いったと思う。

「書かれる立場」への気くばり

から、夫の身辺にかかわる記事に

は慎重だった新聞も、自殺未遂を

境に一步踏み込んだので報道に進ん

でいった。

公権力の情報障壁と、映像によ

るニュースショーの競演。事件報

道の現場は、サマ変わりしつつあ

る。



自殺未遂で救急隊員に運ばれる椎名正(1月16日)

先月のクラブゲスト

ジョージ・シュルツ 米国
国務長官



「マンسفールド大使はもつとも卓越したアメリカ人の一人です。日本は世界の最重要国の一つですので、アメリカとしても真に優れた人物を駐日大使にしなければならぬ。幸いにマンسفールド大使を得ていることは、アメリカにとり恵まれたことであり、日本のみなさんにも称賛していただいていると思う」と、マンسفールド大使の留任を確認した。

冒頭のスピーチなしで、矢つぎばやの七間の質問をゆとりをもってさばいた。

【一日(火) 記者会見 司会 若松信重 理事長 通訳 米倉淑子 出席 二五八名】

ウィリアム・ブロック 米国通商代表

一九五四年に海軍士官として初来日し、六〇年代に二度目のハネムーンを日本で楽しんだという、ブロック通商代表。司会者が、これまでに何度来日したかときいたところ、答えは「数えきれない」。

しかし、頻繁には来日するが、いつも滞在は短時日で、こうしたプレスとの接触も今回が初めて。冒頭のスピーチと質疑応答を通じて、難題をつきつける赤鬼でも青鬼でもなく、誠実で優れた第一級の政治家であり、同時に信頼できる交渉相手との印象を出席者に与えた。

しかし、原則では譲らず、スピーチでオレンジ、牛肉問題に触れなかったのはあきらめたのかとの質問には、はっきり「ノー」。

【十二日(土) 昼食会 司会 高野洋企画委員 通訳 森田啓子 出席 一六一名】



永野重雄 日本商工会議所会頭



訪ソ一週間前の昼食会。出発を前にいろいろ雑音が出てきたせいか、第二パナマ運河と人類愛の話をつまみ。最後の六分くらいで訪ソの抱負を語り、「ご質問でもあればあと十分くらいは……」(通常は質問時間三十分)

【十五日(火) 昼食会 司会 広瀬一郎企画委員 出席 八七名】

椎名武雄 日本IBM社長



アノ事件では日米の文化差を痛感したという椎名氏。質問に答えて、「日常生活で国籍を意識しない日本人。それとはまったく逆のアメリカ社会。日常的に意識されていないので、国際問題になると過剰反応の原因になる……」(二十四日(木) 研究会「新技術」XVII テーマ 人間社会とコンピュータ 司会 村野賢哉企画委員 出席 四六名)

鳴沢宏英 東京銀行常任参与
鈴木秀雄 野村証券顧問

六、〇〇〇億ドルを超える途上国の累積債務、うち三、〇〇〇億ドルが問題債権になっているという。IMFなどの国際機関、各国政府、民間金融機関のレスキュー・オペレーションで、昨年末危機はのり越えたが……【十四日(月)、十七日(木) 研究会「同時不況下の日本経済——国際金融不安」V、VI 司会 今勝行企画委員、平田真己企画委員 出席 四八名、三七名】



陳慕華 中国対外経済貿易部長

アジア開銀への加盟は「関係国と話し合いをしている」。ソ連との国境貿易は「隣接地区の経済状況と人民の生活の必要に応じて行われるもので、対外経済貿易部はこれを支持している」。

【二十八日(月) 司会 武藤慧企画委員 通訳 向連清三等書記官 出席 八二名】



東京支社訪問

ワシントンポスト

二メートルを超す長身、ワシントンポスト東京支局長のトレイシー・ダルビーさん。一九六六年、支局開設時の初代支局長リチャード・ハロラン氏から数えて六代目。奥さんが日本人で日本語もペラペラというが、大のインタビュアー嫌い、なのだそう。そこで東京特派員の東郷茂彦会員。「僕だけが話することになってしまいますが……」。ちなみに、東郷さんは当クラブの会報委員ナノデス。

さて、東京支局は銀座六丁目、朝日ビル九階の一室。ニューズウィーク東京支局と同居している。しかし、大部屋の雰囲気とは大違い。プライベートが尊重されているというのか、ダルビー支局長も東郷さんも個室で執務。

「昨春秋、コンピュータ利用の編集システムへ移行し、KDDのICAS（国際コンピュータ・アクセス・サービス）を使って送稿するようになりました。それを機会にオフィスを改装、それまでは殺風景できたなくて……」。

画面に打ち出された記事は、電話回線を利用してワシントン本社へ送られる。昨秋までは、ロイター通信東京支局から送ってもらっていた。

TOKYO発の記事を、大体週に二、三本まとめる。日米関係の政治・経済を中心に、週末か遅くとも週始めに、ダルビー支局長と東郷さんで、その週の「ネタ」を定める。各省庁の記者クラブでの取材は制限があるが、官邸クラブと霞クラブ（外務省）の公式会見は出席可。し

TOKYO発は掲載率十割

アイデアで勝負の「町ダネ」

かしいわゆる懇談会は出席できない。

「コトがあった時に、頼みこんで……」

といった感じ。でも、今のところ平河クラブ（自民党）はいつもダメですネ。

ベトナム戦争時はサイゴンなどにも特派員がいたが、今はアジア地区での常駐はバンコク（二年前から）、北京（四年前香港から移る）と東京の三か所。だから東京特派員といってもアジア全体をカバーすることになる。

「二代目支局長のハリソンは、北朝鮮への取材行に成功しているし、三代目の

オーバドルファーは、今もワシントンポストにいて外交問題のエキス。例の沈空母発言の記事を書いたのは、彼なんですヨ」。

TOKYO発の記事の扱いの大小はあっても、掲載されないことはないそう。特に中曽根政権はあちらでは「評判がイイ」。

「総裁選以来すでに十五本載っています。扱っても大きいし、写真も大きい」。

三、四日遅れて郵送されてくる紙面の切り抜きファイルを見せてくれたが、なるほどこれま

でとは違うようだ。日本の総理の年頭記者会見や所信

表明が掲載されたのも初めてだという。しかも、一面に……。

「でも、こうした政治モノより町ダネというか社会部ダネの記事の方が、向こうの人は印象に残るらしいネ。例えば、今問題になっている校内暴力など……」。

最近、東郷さんは、横浜の浮浪者襲撃事件を実際に現場に足を運んで取材した。

「アメリカでは暴力事件なんて日常茶飯事なんだけど、日本のような伝統を重んじる国も変わりつつあるのか、と、とても興味があるみたいですよ」。

町田の中学校教師の刺傷事件とも絡めて構想を練っている最中だそう。

「なんととっても、最初のアイデアが勝負だと思っんですヨ」。

少し前になるが、と、ある商社会社について書いた記事の話をしてくれた。

「その社の隣にある将門神社に背を向けて座ると縁起が悪いというんで、全社員の机は神社に背を向けないように並べられているという話を聞いたんです。ヨシ、コレだ、と思って、早速記事にしました」。

東郷さんの部屋は、アイデアの源泉なのだろうか、硬軟多種多様な本でいっぱい。

二月はブロック米通商代表の来日、IBM事件での日立の司法取引決定、トヨタGM合併会社設立、と大ニュースが続いた。

「デリケートに扱わなければならない問題もたくさんあります。支局長と議論になることもあるが、それも僕にとつてすごく参考になる。日本側を遠慮なく批判することもありますが、日本の言い分をアメリカ人に正しくわかるように伝えることも役目だと思っんですヨ」。

（長谷川）

党機関紙「ネープサバチャーグ」編集長語る

ハンガリーの社会主義



ヤーノシュ・ベレツ

柔軟に現実を吟味し、創造的社会主义政策を進め、東側でもユニークな経済政策を採用、実施しているハンガリー。近い将来に党中央書記局、政治局入りも確実と見られている、ヤーノシュ・ベレツ氏（党中央委員）は、きわめて明解にその社会主義の原則と政策について語った。

私の今回の一番大切な仕事と言いますのは、日本について出来るだけ多くのものを見、聞き、そして帰国後、それらをハンガリー国民に紹介することです。しかし、日本のみなさまが私の国について関心をお持ちになり、今日、こうしてナショナル・プレス・クラブに招待されて、ハンガリーについてお話出来るというのは格別の喜びです。

この二日間に、私がお会いした日本の方々は、いずれも私が日本を正しく理解するようにという希望を持っていったように思います。

日本のみなさまは、日本の特殊性というか、個性というものに対して大変誇りを持っており、同時にそのことを外国の人びとも理解してもらいたいと思っているわけです。そういう物の考え方というのは、いわばアジア的なものかもしれません。と申しますのも、私

どもハンガリー人も似たようなことを考えているからです。つまり、私もハンガリー人も、また、ハンガリーの個性というものに対して、それなりの誇りを感じているわけです。私もハンガリー独自の個性というものが、世界からハンガリーを隔てるものとしてではなく、世界とハンガリーを結びつけ、相互理解を深める助けになってほしいと考えているわけです。

ハンガリーについて簡単に紹介させていただきますと、現在のハンガリーが成立しまして約一、一〇〇年ほど経っています。地理的にはヨーロッパの真ん中にあるわけです。しょっちゅう国境線が変わっていたわけです。その国境が動かなくなつて、ようやく三十八年くらいになりますが、現在、九万三、〇〇〇平方メートルの面積と一、〇七〇万の人口を有しているわけです。人口の数でいえば、世界で五四番目の国です。ま

た、ハンガリー語を話すハンガリー人の三分の一、三人に一人がハンガリーの国境の外に住んでいます。これはいろいろとややこしい歴史的な経緯の結果です。今日はここでこのことについては話すつもりはありませんが……。

今日は主に一九四五年以降の経済的、政治的な面についてお話したいと思います。

労働者権力の樹立と個人崇拜

一九四五年以降のいままでの年月を三つの期間に分けて話したいと思います。

第一の期間は一九四五年〜一九五六年までで、この期間には三つの重要な問題がありました。一番目の仕事は、ドイツに占領されていたわけですから、国の独立を回復し、国家機構を再整備するということでした。二番目の仕事は、ハンガリー独特の封建的資本主義社会において形成された、非常に大きな不平等あるいは不公平を正すという仕事。そして三番目は、非常に後進的であったハンガリーの経済を、成長路線に導くことでした。実際問題としてこのうち一つでも実現するのは大変困難なことであるわけです。

しかし、当時のハンガリーとしては、この三つの問題を同時に解決しなければいけなかったわけです。では、それが具体的にどういう具合に解決されたか、という点については、私は話したくありません。ただ減茶苦茶に忙しい十二年であった、ということはいえると思います。二百日にわたる市街戦で、瓦礫と化した首都を復興しました。そして社会的な変革が起りました。わが国では労働者権力が樹立されました。

計画経済の基礎をつくり、農業国から農工業国に変わっていきました。

それとほとんど並行して個人崇拜というものが現われてきたわけです。非合法なことが上のほうから行われるようになってまいりました。つまり、わが国を、このすばらしい路線に導いていった指導者たちが、同時に国を破壊に導いていったわけです。その結果として一九五六年にハンガリーでは、そのような問題が爆発しまして、武装蜂起が起こったわけです。私としては、みなさまにこの爆発について正しく理解していただきたいと思うわけです。というのは、その後のわが国の発展は、まさにこの五六年が元年になっているからです。

それではこの爆発にはどういう特徴があったのでしょうか。まず社会的な見地から言いますと、これは反革命でした。つまり、社会主義勢力と非社会主義勢力の戦争だったわけです。しかし国民的な観点から言いますと、これは悲劇そのものでありません。すなわち、そこで死んでいったのはハンガリー人にほかならなかつたわけですから……。もちろん、経済的な損害もこうむったわけですから、政治的な観点から言いますと、誤った政策の崩壊を表わしておりました。すなわち、政治的には、社会全体がハンガリーの共産党の誤った政策に対して、批判を下したものだとして解釈することが出来ます。

“国民的合意”の原則

第二の期間は一九五六年〜一九六八年に至る期間です。この期間は五六年動乱と関係があります。ハンガ

リー社会主義労働者党の指導者として、ヤーノシュ・カダルが出てきたわけです。彼の政策というのは、五六年までの問題を克服するというところに主眼がありました。崩壊した労働者権力を再び築き直し、そしてまた新しい発展の道へハンガリーを導かなければならなかつたわけです。民族としての傷をいやさなければならなかつたわけです。すなわち、国民が様々な勢力に分裂するのではなくて、一つに統一できるように、連帯を保てるようにというのが、彼の政策だったわけです。

五六年以降わずか四年で、ハンガリーの社会は大変安定いたしました。当時、非常に有名になったカダルの言葉があります。それは「われわれに反対しない者はすべてわれわれの味方である」というものです。その精神によって本質的な国民的和解が成立したとみなされております。労働者権力に対して「こぶし」を振り上げた者たちも、恩赦によって釈放されたわけですから。このときから、わが国の政治の一つの基本になっているのが、国民的合意という考え方です。

もう一つのこの期間の大きな仕事は、農業の発展の問題でありました。

平均して一戸当たり二ヘクタール〜三ヘクタールくらいの狭い土地に、近代的な機械を導入することはそれまで不可能だったわけですが、そのハンガリーの農業の社会主義化、大規模化が一九六一年までに終了いたしました。現在、ハンガリーの集団農場、大規模経営は私どもの誇りとなっていますし、国際的にも大変評価されています。

農業の近代化に成功

農業生産協同組合内では民主主義が保障されています。組合は完全に自治権を持っており、組合長は自分たちのあいだから、農民みずから選びます。年間計画は組合員の合議で決定します。国が彼らに対して直接命令を下すようなことはありません。国は直接的でない経済的方法をいろいろ使い、間接的に影響を与えようと努力するだけです。同時にそこでは大工場の大量生産的な方法が導入されています。たとえば、一ヘクタール当たりのトウモロコシの生産量では、わが国の農民はいまアメリカと競争しているところですから。二十年前にはたかだか二ヘクタールくらいの、猫の額の土地を耕していた農民たちが、いまは最新鋭の機械を運転しています。しかも農業知識人と言われる人たちは、わが国における知識人たちの中で一番新しいタイプとして尊敬を集め、彼らの科学的、農学的な研究、あるいは彼らの開発した技術が農業生産において、どしどし生かされてきております。

副業的な工場生産が農業協同組合で行われていきます。これは、半分工業と言ってもいいようなものなのです。わが国ではわりと多くあるタイプですけれども、一つの農場で、まず農産品としてトウモロコシを生産し、そのトウモロコシをエサに使って同じ農場の中で養豚を行い、同じ農業内の工場でその豚を処理して、加工製品として市場に出すわけです。

それ以外にも、機械の修理工場ですか、あるいは農場独自の建設業務を行うというものがあつまして、それは自分たちの農場内だけのことはなくて、頼ま

ればほかの外の仕事も受けるわけです。その他にいわゆる自留地では園芸も行われています。また、たとえば農業協同組合の組合員は、自宅で好きなだけ家畜を飼ってもいいわけです。家畜を自宅で飼育している農民に対しては、組合がその飼料を保障します。大体四分の三ヘクターくらい自留地で、農民たちは野菜などを生産しています。あるいは組合の牛を借りて自分で牛乳をしぼるとか……。

国は、農業組合に対して二つの大きい仕事をしました。一九六一年〜六六年にかけての国の農業政策は、非常に組合や農民を保護したものでして、それによって組合は大量に機械を購入することができたわけです。国は農民を助けるため、農産品を高い値段で買い取りました。同時に農民たちは社会福祉的な面でもいろいろな恩恵に浴すことになりました。たとえば医療の完全無料化ですとか、年金、長期休暇等々です。昔の農民のように一年に一度収入があるのではなくて、給料がちゃんと払われているわけです。現在、世界の肉総輸出量の二・五％がハンガリーのものです。

計画と市場の調和

この第二期は、のちの経済改革を築き上げるための時期でもありました。すなわち、この時期までに国が行ってきたいろいろな経済政策の結果を考えたとき、いままでのような種類の計画経済では、現実には合わないようになってきているという感じがしてきました。経済改革の枠内で、計画と市場というものの調和を探そうとしたわけです。その中で重要な役割を担ったのが価格体系であり、税金と信用供与の政策であります。そ

して、それぞれの生産単位の独立化が行われました。同時に私どもは、社会の諸階層の中に必ずしも利害が一致しないものたちがいる、ということを確認しました。たとえば一つの企業の中で経営者と労働者のあいだに、利害の対立が起こる可能性もある、ということに気がついたわけです。その結果、ハンガリーの労働組合には新しい可能性というものが生じてきました。すなわち、労働者の利益保護という組合の任務が発展してきたわけです。

計画経済のシステムが変更された結果として、国の行政機構にも変化が必然的にもたらされたわけです。党の経済政策は大局的な計画だけを立てるのであって、具体的な個々の生産については口を差しはさみません。政府も独自化し政府自体のプロフィールというものが強調されるようになってきました。では、その成果はどのくらいかと言いますと、現在、世界における大型バスの総輸出量の一〇％がわが国のものです。

石油ショックとハンガリー経済

三番目の期間は一九六八年に始まりました。西側の高度経済成長が別の時代によって取ってかわられるときでもあったわけです。ハンガリーも日本と同様に天然資源は非常に乏しい国です。一九七三年および四四年の石油ショックは、わが国の経済にとっても大変な挑戦だったわけです。しかもそのショックに対してわが国は、非常に緩やかな対応しか示すことが出来ませんでした。なぜか反応しなかったかと言いますと、政策を誤ったわけですが、この石油ショックは一時的なものにすぎないと判断したわけです。一時的なこと

であろうということで、この価格の暴騰が直接国内に波及しないように、国が調整して企業の保護をしたわけです。国内の企業を保護した結果、どうい現象が起こったかと言いますと、一方で国の信用状態というのはほとんど空っぽになってしまい、他方、国内の企業は非常に高度成長を遂げて、ハンガリーの企業は花開いていったわけです。石油ショック前まで、わが国の対外債務は一〇億ドルもなかったのですが、そのあとは七〇億ドルほどにふえてしまいました。しかし、わが国の企業はそういうことにはまったく無感覚でありました。ただ、彼らが踏みつけにしている国だけがぐたびれてしまったわけです。

しかしながら七七年、七八年に起こりました第二次石油ショックでは、国も目がさめたわけです。当時、国内で議論が沸騰しました。そして二つの結論が出てきました。一つは、いままで行ってきた経済改革をこれからも続けるべきだが、ただ続けるのではなくて、より急進的に進めるべきであるということ。もう一つは、国内民主主義および民主的機関というものをより発展させなければいけない、ということでした。

一九七九年一月から価格改革を行いました。一度に一〇％ないし二〇％くらいの値上げを行ったこともありました。わが国の国民は突然のことにはびっくりいたしました。国民は、生産者としてばかりでなく消費者としても、この現実を目を開いたわけです。わが国の価格体系を、現実にかかる費用を反映させたものにするように、私どもは努力しております。もちろん、幾つかのわずかな部門においては、価格を保護するといふことが現在も行われています。

時には大変なショック療法をすることもあります。

て、今年の夏には家賃を平均一三〇%上げる予定で
す。しかし、このことはすでに昨年の夏、国民に通告
してあります。その結果としまして、国の機関および
企業は労働者たちと新しい賃金体系の相談をしている
わけです。

工業分野での新展開へ

現在、私どもがやっている政策は、三つのグループに
分けることが出来ると思います。一つは、いまの国際
収支の不均衡を是正し、バランスの取れたものに少し
でも近づけるということです。二つ目は、すでに私ど
もが手にした生活水準を防御するということ。そして
三つ目は、工業においても、私どもが農業生産におい
て実現したような可能性を獲得したいと思っております。

新しい可能性が工業分野でも展開されております。
基幹産業の大規模工業経営とともに、中規模および小
規模程度の商業の可能性が生じてきたわけです。労働
者とかエン지니어たちが、自分たちで私営の企業をつ
くることが認められました。何人かの労働者とかエン
지니어たちが集まりました。一つの独立した法人をつ
くりまして、それが各種の生産活動とか、サービス
業務を代行するわけです。いま言ったような法人組織
ではなく個人経営の形でのものは、特にサービス業の
部門で展開されております。たとえば個人タクシーで
すとか、小さな商店、あるいはレストランといった類
いのものです。

もちろん、工業においても生産民主主義というもの
が強化されなければいけません。現在のハンガリーで

は、国が具体的な生産活動に対して直接口をあまり差
しはさめないようになっていきます。そのため企業長た
ちの権限を制限しなければならなくなってきたわけ
です。従来ハンガリーでは、企業の代表権を持っていた
のは一人だけだったのですけれども、今年の一月一日
から経営評議会という合議制のものを導入し始めてお
ります。この経営評議会は決定権もある程度持ってい
ますし、また企業長の顧問みないな性格も持っている
わけです。経営評議会のメンバーも企業長も投票権は
すべて一票ずつです。

同時に監査役会という制度も導入しました。メンバ
ーの一部は企業内から、また一部は企業外から選ばれ
ます。企業の経理状態とか、計画の遂行状態をチェッ
クすると同時に、たとえば労働組合の権利が守られて
いるかどうか、といった問題についてもチェックする
機能を持っています。

企業長たちもいままでとは違ひまして、任命される
ときにある任期が定められます。その任期が切れた段
階で再び企業は企業長の募集をするわけですが、結果
的には前任者がまた再選されるという可能性はあるわ
けです。ただ、これは一部の人たちにとっては既得権
が侵されることになるわけで、いま議論が沸騰してい
る問題です。

平和政策と産業協力

このようなことをすべて考慮いたしますと、わが国
の国際的活動というものが、二つの点に集中してくる
と思うのです。一つは、わが国が国内におきまして、
このようなことを実現するためにも、国の外での平和

というものが必要になってくるわけです。すなわち国
際的な平和政策。一つにはワルシャワ条約機構の枠内
で、また一つには二国間関係というやり方で、非常に
積極的な平和攻勢を、私どもはかけているわけです。
もう一つの重要な政策は、現在の国際的協力関係とい
うものを維持し、発展させるといふものです。わが国
が必要としているものを外国から買うためには、わが
国のGNPの四〇%を外国に売らなければいけないわ
けです。

したがって、具体的には次の二つのことをいま
強力に推し進めているわけです。一つはコモコンをさ
らに強化すること。それによって現在の新しい国際経
済状況に対して、何らかの反応を示さなければいけな
い。現在準備中のコモコン首脳会議で、何らかの対応
が決定されることを、私どもは期待しているわけです。
もう一つは、非社会主義陣営との関係ですが、こ
れまでの伝統的な商業活動のほかに、今後はいろいろ
な協力活動を強化していきたい。ただ売り買いするだ
けではなくて、合併事業ですとか、各種の産業協力を
どんどんやっていきたいと思っているわけです。その
ような点からも、現在、わが国と西ドイツとの関係は
非常に緊密であります。現在、ハンガリーと外国の企
業とのあいだで成立している契約は四〇〇件ほどあり
ます。そのうちの二五〇件以上が西ドイツと結んだ契
約です。

日本とハンガリーとの経済関係の現在の水準は、両
国民がお互いに対して抱いている好感に比較します
と、比べものにならないほど低い状態にあります。い
ままでの伝統的な商品取引だけではなくて、先ほど申
しあげましたような産業協力の可能性というものも検

討しなければいけないのではないのでしょうか。わが国といたしましては、日本のそういう資本投下を喜んで受け入れたいと思っております。そしていままでも以上の数の技術者たちを、奨学金を与えて日本に送り込みたいと思っております。

質疑応答

大谷(朝日) 農業の問題ですが、自留地で生産された農産物は自家で消費してしまうのか、あるいは市場に出すのか。その量は全体の農産物のどのくらいの枠を占めるのかをうかがいたい。

また、ハンガリーの労働組合には法律的にストライキ権が認められているのかどうか。また実際にそういうストライキの事実があるのかどうか。この二点をうかがいたいと思います。

ベレツ 自留地における栽培は、農業生産協同組合の活動と非常に深い関係があります。農民は、組合との契約に基づきまして、ある農産品を生産するわけです。その契約において定められた一定の基本価格にある程度のプレミアムをつけて購入して、組合として市場に売り出す。しかし、そういう契約を結んでいない分につきましては、農民たちが勝手に時価で売ることが出来るわけです。特に野菜と果物の価格は完全に市場の需要と供給によって決められております。

それではちょっと一つ注意いたしますと、私どもの社会におきましては、商業活動についても寡占体制がしかれていくわけです。たとえば、果物とか野菜を買い取ってくれる企業は国営で一つしかありません。その結果、豊作のときはあまり農産品を引き取らないで、価格を維持しようとするようなことがあるわけです。

そういう独占の弊害を調整する意味で、個人とかあるいは農業生産協同組合が独自に市場に売り出せるようなことを保障したわけです。ですから、ちょっとおかしな話なのですけれども、国家が国営企業の独占体制に対して、個人経営者と共同戦線を張って、その独占体制を打破しようとしているわけです。わが国としましても、こういういろいろな経済的操作ということについて勉強しなければいけないと思っております。先ほど申しましたように、わが国は緊急的な国際的な非常時を除きまして、政府が直接に政令とか、そういうものによって価格に介入することはやめていきます。

それから全体の量ですけれども、農業製品の総量の四分の一が自留地からのものです。ただ、ここで忘れてはいけないのは、こういう自留地経営をするためのいろいろな条件は、大体において組合の援助によっているという点です。そういう組合の援助がなければ、これだけの数字は達成出来ないでしょう。

次に労組とストライキの問題ですが、ハンガリー憲法および各種の法律に、労働者にストライキがあると明記してある条文は一つもありません。同時にストライキを禁止する条項もありません。ストライキを避けるための新しい方法を、私どもは考え出しました。労働組合に拒否権というものを与えたわけです。国全体として、あるいは一つの地域におきまして、その企業の労働者たちの利益を損うような形で、ある政策が実行されるようになるときに、ストライキに訴えることがないようになり、労働組合に拒否権が与えられているわけです。労働組合が拒否権を発動した場合には、その政策は実行することが出来ません。これによって、ストライキをやることの必要性がなくなったわけです。

ただし現実にはいままでも、企業全体ということではなくて、一つの班ですとか、あるいは何人かの人たちが集まりまして、主に賃金とか、企業内福祉の問題で、就業を停止したことがあります。しかしながら、労働組合と企業幹部、あるいは企業と国とかの協議によりまして、結果的にそういうものが必要でなくなってきたというわけです。したがって、私どもとしては、労働者がこの拒否権を出来るだけ利用するようにといいことを言っているわけです。

私自身としましては、この拒否権のことを、社会主義的ストライキ権みたいな言い方をするのですけれども……。これを使うことによって労働者にとって不利な決定を覆すことが出来るからです。

国政(読売) アンドロポフ政権が成立して約二か月、まだアンドロポフ政権の基礎が確立していないという見方と、そうではないという見方があります。人事および権力構造、政策の面でどういうふうにごらんになっているか、お考えを聞かせていただきたい。

ベレツ 少なくともここ二十年くらい、ソ連ではあらゆる決定が下される前に、非常に深い十分な議論が行われているわけです。そうした事実を、私どもハンガリーとしては大変喜んでおるわけです。これは信じていただきたいのですが、派閥とか、権力闘争とか、そういう形の物差しで測ることは出来ないと思えます。アンドロポフが築き上げていまいの指導部は、大変安定したものだ、と私は思います。と同時に、比較的早い時期に若返ることになると思います。たとえば幹部会議長がまだ選ばれていないわけです。

西側の新聞記者たちが、私のところへしゅっちゅう来て、「ね、そうでしょう。アンドロポフの足許はま

だ危ないんじゃないか。だからもしかしたら彼が、そういう仕事をやるのを個人的に厭がっているというところもあるんじゃないですか」と言いますけれども、私は、たとえばある種の国の機構改革とかなんとかいうことを、彼がやりたがっているのかもしれないと思うわけです。そうであれば、政府としても当然一つのプロフィールを持つべきだろうし、幹部会としてもプロフィールを持つべきかもしれない。

ただ、アンドロポフが、いま党の地位を強化しようとする方向を目ざしていることは間違いありません。もし、アンドロポフを理解したいのなら、彼の二つの演説を読むことをお勧めします。一つは、一九七六年四月、レーニンの誕生日に際して行った演説です。もう一つは、八二年四月のレーニン誕生百二十周年のときの演説です。そのとき彼はまだソ連の第一人者ではなかったにもかかわらず、改革の必要性を言っており、社会主義体制内における利益の複数主義や利害の複数主義ということをおっしゃっています。社会主義国に新しい矛盾が起こってきているとか、そういうことも彼は言っているわけです。そういう彼の考え方からして、今後重要な改革等が行われるのではないかと、いうことを、私としては期待しているわけです。

前田（読売） 国民の合意あるいは市場原理とか、あるいは自由競争とか、そういうものがかなり国の政策として重要視されているように思いますが、国民のいろいろなコミュニケーションを自由に進めるといふ点で、どのような形のメディアがハンガリーにおいては存在し、それがどのように活用されているのか。その点が第一点です。

それから、これは人間のことですから、いろいろな

経済犯罪その他のいろいろな不正事件があるのは当然だと思えますが、そうした場合に、国民にとって好ましくない出来事などの程度知らされ、かつ、それが、たとえば裁判などを通じて、どの程度国民に公開されているのか、という点についてうかがいたい。

ベレツ 一つにはハンガリーの置かれている地理的問題があるのですが、ヨーロッパのまん中にありまして、小さな国ですから、情報とか、ニュースをストッピングするというのが物理的に不可能なわけです。仮に何かを秘密にしようと思っても、それほど長期間秘密にしておくということは不可能です。もちろん、私が言っているのは、かつて毛沢東が言ったような意味ではありません。彼はハンガリーは人口一、〇〇〇万程度の小さな国だから、みんなお互い同志で顔も知っているんだらう、と思っていたわけです。お互いのことは知らなくても、ハンガリー人は誰でも何でもありとあらゆることを知っているわけです。しかもハンガリー人の大部分は、それを実行している人間よりもよく知っているわけです。(笑)ですから、そういう宣伝とかなにかに關しましては、私どもは非常に開放的です。

まず口頭で喋る際秘密はありません。したがって、今日ここで行われているような質疑応答みたいなことを、私どもは結構あちこちで行っています。だから私がこんどこういう仕事をまかされたのも、こういう質疑応答やなにかを昔からやってきたからかもしれないですね。つまり、どうせ私がこういう仕事にふさわしいのなら、では本職としてやってもいいでしょう、ということだったのかもしれない。ハンガリーでも質問されたことに対して、それは微妙な問題であると

いうか、あまりよくないのではないかと、という答えをする必要は普通ありません。大体、そういう問題は最初からみんな質問してこない。(笑)

ハンガリーのラジオニュースを注意して聴いている人は気がつくかもしれませんが、朝のニュースは昼間のニュースよりも詳しいのです。しかもラジオの場合は新聞よりもずっと多くの情報が流れております。すなわち、文字の形ではいろいろな国の機密であるとか、社会的な秘密とか、保護しなければならぬ情報が幾つかあるわけです。

ちょっと自分のことで申しわけないのですが、私がこの新聞に回されたのは昨年の六月末だったわけですが、八月初旬に物価を上げました。この物価の値上げに対して、多くの国民が厭な感じを持ったというか、当然ながらいいこととは思わなかった。社会にとっいていい物価の値上げというのはあるはずはないのですけれども、この値上げは突然行われて、しかも何の説明も与えられなかったわけです。その結果、国民のあいだに、ある種の緊張感みたいなものが生まれました。みんな腹立たしく思ったわけです。そのことを、私どもは八月二十日の新聞に載せました。私どもの新聞は、このような重要な決定をかくも性急に、しかも突然導入することはいけない、そんなことをすれば国民が怒るのは当たり前ではないか、というようにことを書いたわけです。自分たちの問題に關しては、かなり勇敢に書けるわけです。

一つ問題があります。これは正直に申し上げます。社会主義諸国間で一つの不文律みたいなものが出来ています。自分たちがいるところ、立っているところにおいて宣伝とか、そういうものをやろう、というもの

です。自分たちのことだけを話しているのはいいのですが、当然の結果としてわが国民はもっと先のことも知りたいと思うし、また先のことを知っても大丈夫だと思おうのですが、周りの諸国との問題がありますから、現実にはそれを実現することは不可能だと思われるわけです。

社会的な犯罪はつねに報道されております。ハンガリーでも警察と新聞記者のあいだに対立があります。新聞記者のほうでは、逮捕された段階でセンセーショナルな記事を書きたがるわけです。しかしながらわが国の法律は、裁判によって有罪が決定し、すなわち犯罪者だと確定するまでは、その人間の個人的なプライバシーとか、権利を守るわけです。したがって、大体的場合におきましては、裁判所の要求を聞き入れまして、判決が下るまで待って、その段階で記事を書くわけです。ただ、一部の犯罪につきましては、判決が下る前に記事にする場合があります。それが非常に多くの国民に関係することであったり、あるいは書かなくてもすでに巷の噂になっていて、みんなが興味を持っていて、そのようなことの場合、そのときはもちろん本当のことはまだはっきり分かっていない、という書き方をするわけですが……。

青木(朝日) 二つお尋ねしたいと思います。一つは、ハンガリーが現在の政策を進めていった場合、やがて、もはやいわゆる社会主義とは言えない体制になるのではないかと。

第二点は、ポーランドの「連帯」の闘争をどういうふうに見ているか。

ベレツ 社会主義というものは、国によって独自の実現のしかたがあると思うわけです。社会主義の一歩

的な条件みたいな話をしていただけでは十分ではありませんんで、その国の置かれている環境とか、伝統とか、そういうものを考慮しなければならぬわけですね。したがって、いま現実に発展しつつある、あるいは形成されつつある社会主義諸国の中には、お互いに似てくるものもありましょうし、国によっては非常に違ってくるようなものも出てくると思われるわけです。私どもが現在実行しておりますことは、少なくとも部分的には社会主義の要求を充たしているものだと思います。

私どもとしては、かつて過去において行われた誤った政策を、直したいと思うわけです。非常に性急に過ぎて、まだ機が熟していないにもかかわらず無理やりやろうとしたために起こった弊害、そういうものを昔にまで戻そうということです。

現在行われている経済政策の中でも、一部の物事は強化されてきておりますし、また、私どもがいままでとても馴染んできたもので、非常に好きなものであっても、現在の社会で消えていくものも出て来ているわけです。それが新しい経済の要求を充たしてないからです。やがてまたまったく新しい政策を導き出さなければならぬかもしれません。それはいままでハンガリーでも、ほかの社会主義国でも存在しなかったような政策になるかもしれません。少なくとも社会主義の問題に関しては、私どもはそういう見方をしているわけです。

ポーランドの「連帯」問題ですが、ポーランドの「連帯」というのは、非常に特殊な条件の中で生まれてきたわけです。社会主義を建設中のポーランドの社会自体が、危機的状況に陥ったわけです。しかもこの

危機の中で最大のものは、ポーランド共産党と国民とのあいだの信頼関係の危機だったわけです。「連帯」がポーランドにおいて、あのとき成立したということでは、当時の客観的な状況や必要性を反映したものだと思われまます。「連帯」に関しては、ポーランドにおける私どもの友人と同様に、この新しい労働組合がポーランドの労働者の利益を代表し、保護する組織として、新しいポーランドの社会の中に参加していくものと期待していたわけです。したがって、この段階におきましては非常に注目すべき特徴を「連帯」は備えていました。しかし、一九八一年前半からだんだんと「連帯」の性格に変化が現われてきました。しかも一九八一年七月の第九回大会のあと、「連帯」のこの変化のスピードが急激にアップしました。すなわち、そのときから「連帯」は権力機関になろうとしたわけです。それを反映したのが一九八一年九月および十月に開かれた「連帯」の大会です。一九八一年十一月のラドムでの幹部会議においては、はっきりと権力奪取ということを明言しています。八一年十二月に入りますと「連帯」は、十二月十七日に、権力を奪取するためのストライキを行うことを発表しました。十二月十三日の国の行動は、その十二月十七日を防ぐためのものだったわけです。

私どもの考えによりますと、この十二月の段階での「連帯」というのは、前の年に生まれた「連帯」とは異質のものになっていったと思われるわけです。したがって、一言で「連帯」と申しましたが、その「連帯」の発展段階によって、それに対する評価は変わってくると思います。

白田(共同) 一つは、おたくの指導者であるヤ

ノシュ・カダル氏がすでに就任してから四半世紀を越えていると思えますけれども、非常に優れた指導者であるという事はわれわれもよく知っておりますが、しかし、非常に長期政権化しているという事で、仮にカダル氏が政治的に退場するという場合に、次の後継体制には問題はないのかどうか。

もう一つは、世界共産党会議が一九六九年に開かれて以来、開催されていないわけですが、そういうことがもはや不可能になってくるのか、あるいはその必要がないのかどうか。

ベレツ 最初のカダルに関する質問は、ハンガリーでもみんなが興味を寄せている問題です。一介の庶民も非常にこのことに関心を持っているわけです。たとえば時々国際的緊張が急に高まりますと、庶民たちは教会に行きまして、「神様、どうかカダル様の健康を守って下さい」とみたいなことをお祈りするわけです。

しかしながら自然の法則というものは、こういうお祈りに対しては無慈悲であります。現在のところまだ彼の健康はしっかりしているようですが、現在のところ、というところと語弊がありますが、いままでずっといいわけです。頭脳もいまのところ明晰でありますし(笑)、非常に精力的な生活をしておりまして。彼には長所がいろいろあるのですけれども、一つ際立ったものがあります。彼が休息を取っているときは、党の機関紙「ネーブサバチャグ」だけを読んでおられます、電話をかけるのもいけないのです。二つの重大事件が起こったときは、電話をかけてもいいことになっています。その二つの事件とは、世界平和が実現されたか、あるいは世界戦争が勃発したか、そのどちらか的时候了。そういうときでも大体人の生活というの

は普通に行われているものですが……。

ある共産党の代表団がカダルに会いまして、そのときに「あなたが死んだあと、いったいハンガリーはどうなるのかね」と質問したとき、私もその場所におりました。彼は「いまハンガリーが行っている政策は、私人の政策ではなくて、ハンガリー社会労働党としての政策である。いまの党の政策を継承していく人材は育ってきているし、多少は色が変わったとしても、基本的には変わらないはずで、その点、私は安心してゐる」と言っておりました。

共産党のいろいろな会議は、地域的なものであれ、また世界的なものであれ、世界的な共産主義運動に関わっている、とハンガリーの指導部は考えております。したがって、そういう世界大会みたいなものを開くときには、準備段階というのが非常に複雑になってきます。まずそういう世界大会を開いたときには、決してすべての党が参加するわけではない、ということに慣れなければならぬ。そして参加するというものが自主的なもので、強制されるべきでない。しかもその会議において提案されたものうち、実際にそれぞれの党がどういうものを自分たちの党でやるかということも強制されるものでなくて、自分たちが自主的に決めるものであるということを確認しなければいけない。しかも仮にそういう世界会議を開いた場合、参加した党が参加しなかった党に対して、あいつらは敵だとか、裏切者であるとか、そういうことを言わないような条件が必要になるわけです。

ヤーノシュ・ベレツ(Dr. Janos Berecz)氏略歴

一九三〇年九月十九日生まれ、五十二歳。六三年(

58・1・11 通訳 深谷志寿 文責・編集部)

六六年モスクワの社会科学アカデミーに学ぶ。七二年と七四年党中央委外交部副部長。七四年と八二年同部長。八〇年から党中央委員。八二年六月から党機関紙「ネーブサバチャグ」編集長兼務。同紙は約七六万部の発行部数を有する最大の党機関紙(日刊)。

試写会『ガンジー』

去る一月二十六日と二月一日にコロンビア映画社の協力を得て、『ガンジー』の試写会を行いました。が大変に好評で、予定した百五十枚の試写券はあっという間にはけてしまいました。

ぜひもう一度試写の機会をつくってほしいとの、会員の声を同社宣伝部に伝えたところ、それは、「今度は銀座ガスホール貸し切りでやりましょう」となり、三月九日再度試写会。



四百名は入るから希望会員すべてに試写券を渡すことが出来ると思いきや、案内発送後四日目には「試写券もうありません。驚くべき人気。」



▼二月二十五日、ガンマ通信の東京事務所を開設しました。秋葉原駅より徒歩三分のところ。お近くへおいでの時はぜひお立ち寄りください。

住所 100 東京都千代田区神田松永町25 パシフィックビル4階
電話 二五一—四三三二

個人D 栗田 格

▼六八年第二回UNCTAD以来、十五年ぶりでインドに来ています。第七回非同盟会議のカバーですが、出席約百か国、第三世界最大の会議となりました。米ソ関係のきびしい状況下、東西いづれにも不偏という基本的性格を、果たしてどれだけ貫けるかどうかが、第三世界自体、深刻な対立を抱えているだけに、大きく真価が問われることになりました。

個人D 米谷健一郎

▼三月一日から五月十一日まで、スウェーデン大使館後援で『スウェーデン映画の史的展望一九一〇—一九六九』を京橋のフィルムセンターで催しています。

スウェーデン映画の名作五十作品を

集めて連続上映します。上映作品の代表的なものは、グレッタ・ガルボ主演による無声映画「イェスタ・ベルリング物語」、イングリッド・バーグマン主演の「間奏曲」、イングマル・ベルイマン監督の「野いちご」、「不良少女モニカ」などです。
プログラムなどの詳細については大使館広報部までお問い合わせください。

在日スウェーデン大使館

一等書記官 マグナス・ロバック

▼グザヴィエ・ド・フレリス・ド・ラ・シュヴァリエ駐日大使が一月二十七日離任しました。

後任は、前インド大使のアンドレ・ロス氏で、二月末に来日し、近く着任の予定です。

ロス大使は国立行政学院を卒業、在インド大使館商務アタッシェを務めた後、五一年から五四年まで在日大使館勤務を経験しました。六八年駐ラオス大使、七二年駐ザイル大使、七九年駐インド大使を歴任しました。

国家功労章オフィシエ章、レジオン・ドヌール・オフィシエ章を受勲しています。

在日フランス大使館情報部

弥永 康夫

第38回会報委員会

昭和58年2月9日(水)
日本記者クラブ小会議室

二月号会報の反省と意見交換の後、三月号会報の編集について協議した。

『ワーキングプレス』はプロ野球キャンプ、千葉の女医殺しをカバーした記者にそれぞれ執筆してもらうことにした。
出席 小林委員長、桂、斎藤、中沢の各委員。

第67回会員資格委員会

昭和58年2月9日(水)
日本記者クラブ小会議室

三月一日付での入退会を審議し、理事会へ答申した。

出席 加藤委員長、細川、赤松、鈴木、亀山、山田の各委員。

第98回企画委員会

昭和58年2月14日(月)
日本記者クラブ大会議室

司会を担当した委員から、前回企画委員会以降の行事報告があった後、三月のクラブゲストと行事について協議した。

その結果、二階堂進自民党幹事長、安倍晋太郎外相、竹下登蔵相、崔慶祿駐日韓国大使らを昼食会ゲストとして招くよ

う折衝することとした。

また、青年海外協力隊の活動を考える会を行うことにし、軍事技術およびソ連についても研究会のテーマとして検討することにした。

最後に第二十一回総会(昭和五十八年度通常総会)の記念講演の講師選定についても意見を交換した。

出席 藤村委員長、本島、石丸、宮本、広瀬、米、高野、武藤、鈴木、永町、河野、ヒルシャー、今、村野の各委員。

日本記者クラブ賞推薦委員会

昭和58年2月22日(火)
日本記者クラブ大会議室

殿木圭一氏を委員長に互選し、候補十件について意見を交換した。

出席 殿木圭一、平田真巳、村上孝止、野崎茂、村尾清一、大森幸男。

第23回総務委員会

昭和58年2月23日(水)
富美川

昭和五十八年度事業計画ならびに予算編成方針等について協議した。

出席 鶴田委員長、若松理事長、中江、常盤副理事長、加藤、吉岡、江尻、泉の各理事。

レストランメニュー

(以下のグラントメニューのほか、2日毎に変わるランチメニュー(洋食コース3種類、和食2種類)および4種類の特別一品料理、果物を用意しております)

APPETIZERS

アラスカ特製フォアグラ.....	800円	鮭の燻製.....	900円
小海老のカクテル.....	600円	蟹のつめバター焼.....	800円

SOUPS

ポタージュ.....	250円	コンソメ.....	250円
オニオングラタン.....	350円	コーンチャウダー.....	400円

SEA-FOOD

車海老のフライ.....	800円	車海老トマトソース煮.....	800円
鮭の網焼.....	700円	舌平目ホーレン草敷グラタン.....	700円
舌平目のバター焼.....	700円	伊勢海老のクリーム合えチーズ焼.....	3,000円

CHARCOAL BROILER

サーロインステーキ.....	3,000円	テnderロインステーキ.....	3,000円
ハムステーキ.....	1,500円	ハンバーグステーキ.....	700円
グリルチキン.....	700円	仔羊背肉のグリル.....	900円

SALADS

ハートレタス.....	400円	スライストマト.....	400円
トスサラダ.....	400円		

ENTREE

ウィーン風仔牛肉のカツレツ.....	800円	グリルフランクフルトソーセージ.....	750円
(バターソース)		仔牛肉黄金焼.....	800円
フランクフルトソーセージ		ビーフソテーハンガリー風.....	900円
サワークラウト.....	750円	牛肉ストロガノフ風.....	900円
牛舌肉の煮込み.....	1,000円	チキンソテーイタリー風	
ジャリアピンステーキ.....	2,300円	スパゲッティ添え.....	700円

SANDWICH, SPAGHETTI and RICE

取合せサンドウィッチ.....	700円	スパゲッティミートソース.....	600円
アラスカ風スパゲッティ.....	600円	チキンカレーライス.....	600円
ビーフカレーライス.....	650円	ピラフ(チキン・海老).....	600円

DESSERTS

アイスクリーム(バニラ・グリーンティ).....	150円	シャーベット.....	150円
コーヒ.....	120円	紅茶.....	120円
小コーヒ.....	60円	プリン.....	150円

貸室料

つぎの料金をクラブ施設内の各室を会員にお貸ししています。

料金はいずれも2時間単位です。カッコ内の料金は2時間を超えた場合の30分ごとの追加料金です。

各室ともクラブで行うのにふさわしい会合にご利用いただいております。

利用申込み者ならびに請求書の送付先もクラブ会員に限らせていただいております。

- | | | | |
|---------|------------------|---------|------------------|
| ① 大会議室 | 10,000円 (2,000円) | ④ 宴会場 | 20,000円 (3,000円) |
| ② 小会議室 | 8,000円 (1,500円) | ⑤ 記者会見室 | 15,000円 (2,500円) |
| ③ 応接会議室 | 10,000円 (2,000円) | | |

プロフィール

三月一日付入会の個人D会員、法人賛助会員、特別賛助会員の方がたです。

紹介 合会

2日▽池波正太郎さんの還暦を祝う会(朝日 井上巖会員)
 4日▽放送通信制度研究会(NHK 片岡俊夫会員)▽臨調問題懇談会—真藤電々公社総裁と関係ジャーナリスト(電々公社 鳥山秀貞会員)▽在京九社編集局長会(協会 林利隆会員) 7日▽83フジ・サンケイクラシック記者発表(フジTV 渡辺修会員) 8日▽座談会『環境アセスメント・今後の展望』—酒田哲野村総研専務、大島恒男三井共同建設コンサルタン社長他(日本工業 前本勝佑会員)▽神宮司房義氏激励会(中京TV 山本千吉郎会員) 9日▽ソ連・東欧記者会—各社のソ連・東欧諸国特派員経験者の集まり(毎日 平野裕会員)▽世論調査会(読売 荻野直紀会員) 10日▽プロ・ゴルフ日本リーグ記者発表会(報知 鮎田大造会員)▽統一地方選挙打ち合わせ会(サンケイ 宮本倫好会員) 14日▽在京外信部長会(協会 林利隆会員)▽北原晴光氏を偲ぶ会(中村泰次会員)▽金融座談会『金融変革と信金経営』—日吉章大蔵省中小金融課長、新納太郎八千代信用金庫理事長他

(時事 小林正雄会員) 15日▽岡崎久彦外務省企画調査部長講演会(米谷健一郎会員)▽日本婦人放送者懇談会82年度SJ賞授賞パーティー—文化放送CM部ディレクター・五井千鶴子さんが受賞(TBS 高階玲子会員) 16日▽第一回香港・北京国際ラリー記者発表(博報堂 石川忠克会員)▽小山久二郎氏出版記念会(中日 加藤巳一郎会員)▽税制座談会—富岡幸雄中央大学教授、海老名正教氏他(エヌビー通信 野口観星会員)▽十七社会(東奥日報 柿木原政則会員) 18日▽広告開発部会(協会 権田萬治会員) 19日▽東京写真記者協会打ち合わせ(共同 石渡和夫会員) 21日▽在京スポーツ紙編集局長会(協会 林利隆会員)▽JNN編成部長会・懇親会(TBS 蟻川茂男会員)▽金融座談会—笠原慶太郎東京都信用金庫協会会長(時事

小林正雄会員)▽四月改編番組販売説明会(関西TV 楠田久泰会員) 22日▽東京愛媛クラブ例会(愛媛新堀定省会員) 24日▽日豪ジャーナリズム賞選考会—82年を通じて日本の新聞、雑誌に掲載された記事の中から日豪関係促進に値するもの一篇を選び贈賞(吉田力会員)▽民報協記者研修会—ゲスト伊東正義元外相、奥平康弘東大教授(日本テレビ 海野修太郎会員)▽国際コミュニケーション研究会懇親会(協会 宮地進吾会員) 25日▽第九一回経営管理研究会(協会 山田幸男会員) 28日▽グンゼワールドテニス記者発表会(毎日放 森本宏会員)

〔会員がクラブ施設を利用して行った会合の主なものです。二月の総回数は八八回でした。〕
 (内は申し込み会員名)



香港・北京国際ラリー
 記者発表 (16日)

5月1日から5日まで開催される「第1回香港—北京国際ラリー」のシンボルマークです。同ラリーは国際自動車連盟の公認レースで、香港のニューワールドホテル前をスタート、揚子江、黄河を渡り、ゴールは北京の老山モーターサイクル競技場で、全走行距離3,400kmという壮大なレースです。日本からも10台以上の参加が見込まれています。

◆囲碁同好会◆

〔二月例会・二十九日〕新年打ち初めとあって、十八人が参加、総対局数三十二局、成績は次のとおりでした。

一位・出田裕四段(東京)、二位・新井明四段(会長・日経)、三位・内川芳美二段(D)、四位・川本和孝三段(D)、下村澄三級(毎日放送)。

〔二月例会・十九日〕十六人が参加、総対局数三十六局、成績は次のとおりでした。

一位・出田裕四段(東京)、菊地俊朗三段(信毎)、二位・吉沢正也五段(D)、安原和雄三段(毎日)、井出新六二級(D)。

一、二月の成績の結果、出田四段が五段に、菊地、安原の両三段が四段に、それぞれ規定により昇段を果たしました。

次回例会は三月二十六日(土)午後一時から開催します。会費千円。ウイスキー飲み放題、成績優秀者には賞品も用意してあります。初めての方も大歓迎です。

タバコの火にご注意!

昨年七〜十二月の半年間、クラブのカーペットのタバコの火による焼け焦げ処理が五件ありました(プレスセンター調)。ホテル〇〇の二の舞を演じることのないようご協力を。



東京ディズニーランド見学会 (10日 参加 100名)

湊会員(読売)がポーン上田賞

湊和夫会員(読売新聞論説委員)が、一九八二年度ポーン上田記念国際記者賞を受賞しました。同賞は毎年国際理解のために顕著な業績を残した日本人ジャーナリストに授与されるもので、今回は湊会員と新井康三郎氏(読売新聞外報部次長)が選ばれました。両記者は、昨年読売新聞一面に長期連載された「アメリカNOW」「ソビエトNOW」の企画、取材の総括責任者で、多年の特派員生活の体験を生かし、米ソ両国の素顔をわかりやすく活写したことが評価されました。

扇谷正造会員が放送文化賞

扇谷正造会員(個人D)が、第三十四回放送文化賞を受賞しました。

多年にわたる放送番組での鋭い洞察力にとんだ発言、特に若い世代への熱意あふれる直言は放送番組に大きな活力を与え、またNHK放送用語委員会委員として放送用語・放送文章改善に貢献するなど、放送文化の向上に寄与したことが評価されたものです。

新旧儀典長がご挨拶に

二月二十五日(金)午後、外務省の新旧両儀典長がクラブを訪問しました。国・公賓を迎えるの昼食会、記者会見の開催など、当クラブと外務省の儀典室や情文局はいわば、もちつもたれつとの関係。西田誠哉前儀典長はスイス大使として、四月八日出発予定とのこと。新儀典長の角谷清氏は、これまでハンガリー大使をつとめられていました。

昼食会のキャンセルは一時間前までに

昼食会に申し込んだあとで、都合が悪くなった場合は必ずキャンセルの電話をクラブ受付へお願いいたします。キャンセルは昼食会の一時間前まで有効です。無断で欠席の場合は、会費(食事代)をご負担いただくこととなりますので、ご注意願います。

寄贈書

不思議な不思議なニッポン人

B・レンガー著/青柳森編

放送記者のみた中国

青柳森著

計報 工藤弥市会員(特別賛助・放送番組向上協議会専務理事)が、二月十日、くも膜下出血のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

三月の行事

10日(木) 午後1時~2時30分 シリーズ研究会

『同時不況下の日本経済』(Ⅶ) 吉富勝経済企画庁総括主任研究官 クラブ記者会見室

14日(月) 午後2時~4時 シリーズ研究会『新技術』(Ⅷ) 神田泰典富士通オアシス開発部長 クラブ記者会見室

16日(水) 午後3時30分~4時30分 クーパーニュージールランド外相兼貿易相記者会見 クラブ記者会見室

22日(火) 午後2時~4時 シリーズ研究会『同時不況下の日本経済』(Ⅷ) 田中直毅国民経済研究協会研究部副部長 クラブ記者会見室

会報委員長 小林淳宏
委員 桂敬一 斎藤吉史 東郷茂彦 中沢道明
連絡 長谷川(事務局) 〇三―五〇三―二七二一